

野木小同窓会報

同窓会報

第 13 号
平成 12 年 12 月
野木小学校同窓会編集部



一年の歩み—報告に代えて—

第39回卒(昭和23年)玉置
同窓会長 新田 賢

「野木小学校同窓会報」第一号が昭和六十年十二月に発行されて以来、五年ごとに発刊される「会誌(同窓会名簿)」を除いて十三号を数えるに至りました。「同窓会報」は会則で本会の目的としている「会員相互の融和と協調を図り、母校の発展と教育の振興に寄与する」ことの実践のため、本会の事業として会則に規定し、歴代の役員、編集委員の献身的な取り組みで現在に至っております。誠に同慶の至りであります。今回もまた多くの「玉稿」を寄せていただき、紙面を飾ることが出来ました。会員各位の本会事業に対するご協力、ご支援と併せて、寄稿下さいました各位に厚くお礼を申し上げます。

さて、自然の確かな営みにより、ここ野木の里にも四季の豊かな恵みがまんべんに施されました。また、シドニー五輪の感動も忘れられません。心安らかな一年を送ろうとしております。ただ、今夏は非常に暑く、六年ぶりの早魃が心配されました。また鳥獣、病虫害も例年なみのものがありましたが、関係の皆さんの努力を得て、大過なく喜ばしい限りであります。しかし、目を内外に転じれば、火山の噴火、地震また、水害による避難生活を余儀なくされている方々、紛争が絶えない国々、食糧不足で飢餓に苦しむ人々のなんと多いことでしょうか。一日も早い回復と安定を願わずにはいられません。児童生

徒に関する事件も多発しています。また、教育を巡る議論も熱を帯びてきました。まもなく二十一世紀。政府の教育改革を待つまでも無く、教育の原点は家庭であることを再認識していただき、人間性豊かな、創造性に富む日本人の育成に、またこの国を地域を担う人材の育成に、学校と地域が一体となった取り組みを強くお願い致します。

そうした中で、本会の今年度事業を進めて参りました。会報の発行に向け会員各位にご無理を申し上げながら、準備をして参りました。会費は各集落の区長さんにお願ひし、全額徴収いたしました。入学式、卒業式にも参列させて頂き、感銘を覚えました。卒業十七名に対し、入学七名という状況を、同窓の各位はどのように判断されるでしょうか。皆さんと十分検討すべき課題だと思えます。「山青く水清き故郷」は永遠です。同時に思い出の詰まった懐かしい学び舎は、不滅でなければなりません。母校の更なる発展に、会員各位の一層のお力添えをお願い致します。

会計の状況につきましては別紙に記載させて頂きますので、ご

参照頂き、ご子承賜りますようお願い申し上げます。

本誌がお手元に届くころには、歳末で心せわしくお越しの中にも、新しい年への希望を確かなものにすべく、思いを馳せておられることでしょう。会員各位の益々のご健勝、ご多幸を心より念じまして、ご報告を兼ねご挨拶と致します。



地域の学校

学校長 岩本 守博

ふと見る窓景に、早くも冬へと速度を上げている様子が感じられる今日この頃です。会員の皆様には益々ご清祥にお過ごしのこととお慶び申し上げます。日頃より同窓会の皆様初め、地域の皆様方から多大なるご支援を頂きまして本校の教育活動を推進させて頂いておりますことを、衷心より感謝申し上げます。

さて、まもなくミレニアムの終わり始めを迎えるという記念すべき時期を迎えて、時あたかも日本国内は教育改革の最中でございます。政府

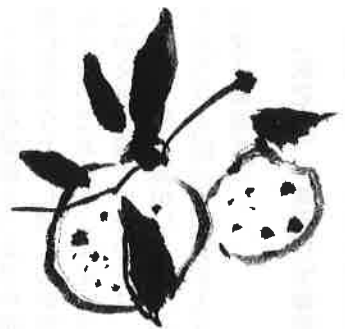
直属の「教育改革国民会議」や文部省の各審議会などから矢継ぎ早のごとく改革路線が伝えられてまいります。いずれも、未だかつてなかった大きな改革に学校現場としてはとまどいを感じつつ、この新たな事態を厳しく受け止めている次第でございます。

まだ中間報告の段階ではありますが、「教育改革国民会議」が行った提案のいくつかをあげてみます。

○ 教育の原点は家庭であることを自覚する。

○ 親が人生最初の教師

○ 奉仕活動を全員が行うよ



うにする。

・小中学校は二週間

○ 問題を起こす子どもへの教育をあいまいにしない。

・教育環境を守る

○ 一律主義を改め、個性を伸ばす教育システムを導入する。

・半分は中高一貫教育

○ 職業観、勤労観を育む教育を推進する。

・企業、団体との連携

○ 地域の信頼に応える学校づくりを進める。

・学校評議員制度

○ 学校や教育委員会に組織マネジメントの発想を取り入れる。

・運営スタッフ体制の導入

○ 授業を子どもの立場に立つた、わかりやすく効果的なものにする。

・社会人等の登用

○ 新しいタイプの学校の設置を促進する。

・コミュニティ・スクール

○ 教育振興計画を策定する。

○ 教育基本法の見直しについて国民的議論を希望する。

紙面の都合上すべてをご紹介できませんが、全部で十七の提案となっています。いずれもかなり具体的な提案であるばかりでなく、早期実施の

追い風を背負ったの提案でもあります。

また、この上に、文部省は

「教育課程審議会」に「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」という諮問を行い、その中間まとめもこの十月に出されま

した。これは、小中学校から今までのような5・4・3・2・1といった相對評価をなくし、絶対評価を中心にした方向への転換を求めたものであります。学校現場における評価基準や評定基準の作成作業が大変であることは言うまでもありません。

このような状況の中で、私たちはまさしく手探りで新しい学校のあるべき姿を模索し、子供たちの健やかな成長の支援に努めさせていただくこととなります。全職員が一つになつて邁進すべきは言うまでもありませんが、それでもなおおぼつかなが多分に出てまいることと思ひます。何卒、「地域の学校」づくりのために旧に倍してご支援賜りますよう心からお願ひ申し上げます。次第でございます。

最後になりましたが、会員各位の益々のご健勝を祈念申し上げます。

地名の由来を推理する

第42回卒(昭和26年) 杉山 町議会議員 高木貞夫

野木地区に伝えられている地名の中から、特に珍らしい地名を紹介し、その由来を推理してみたいと思う。

現在、私どもの集落に残されている古い地名は、文字の無い時代の口伝えに始まり、漢字の流入に従つて、その言葉に適當な文字を当てはめて表記されるようになった。

その後、漢字から仮名文字が生まれ、漢字と共に仮名でも表記されてきた。また、明治初期には、土地を確定する政策を進めるに当たり、仮名の地名を適當な漢字に置き替

えたことから、現存する地名の中に、難読のものや難解なものが多く残されている。そして、それらは私どもが既に失つてしまつた言葉であり、意味が不明のままに、まるで符号のように取り扱つて

いるところである。そこで、珍しいが故に難解な地名について、その由来を推理してみよう。

「新造」 杉山村

清月寺へ向かう参道の登り口附近にあつて、北側の尾根の先端部分に位置する小平担地である。

「新造」とは、文字通り新しく造り出したことなのだが、周辺の情景を見てもどの様な事情で造成されたのか、見当がつかない状態になつて

いる。おそらく、大川の堤防を築くために尾根の先端を大規模に削り取り、その跡の平坦地に命名したのであろう。比較的に新しい時代の地名なのだが、時の経過と共に、草木が繁茂して、山腹を削り取つた跡が見えなくなると、その由来も判明しにくくなる好例であらう。

「肥後殿」 堤村

波古神社の西側を下る古い幹線道路を挟んで、反対側の山裾に添う細長い土地の一部分である。

「ヒコ」は「ヒコ」の転化で

凹形のことを、「下ノ」は「トノ」の転化で棚状の様子を示している。これは山裾の張り出しによつて、極端に狭くなつてゐる上に段差の大きい地形であることを、強調して表現したものであろう。

文字だけで判断すると、大名の屋敷跡ではないかとの錯覚に陥ることになる。

「定子」 加福六村(上兼田)

圃場整備が行われるまでは、北川と杉山川の合流点の先端部に、この滑稽な地名があつて、川と川に挟まれた小平担地であつた。

「サダ」は陸地の端のことを、「チン」は「チン」の転化で自然堤防上の小平地のことを示している。

これは川に張り出している小面積の台地を表現したものであろう。

この様な愛嬌たつぷりの地名に出合うと、しばし心が安らぐものであるが、おそらくこの文字を残すについては、さまざまに議論が尽されたことだろう。当時の勇氣ある人々に深く感謝する。

「京之尾」 兼田村(下兼田)

加福六村との境界の附近に

あつて、山裾に添いながら細長く延びている曲線状の土地である。

「キョウ」は境界のことを、「ノオ」は「ナエ」の転化でたわんだ地形を示している。

これは村の境界になっている山に添いながら、細長く曲線状に延びる地形を表現したものであろう。

昔の人々は今にも増して、京の都への憧れが強く、そのために「京」の文字を地名に当てたと言われている。

「タモノ木」 武生村

玉置村との境界になつている山の裾野が描く外曲線に添いながら、脹んでいる広い区画の土地であつた。

「タモノ」は「タマ」の転化でたわんだ地形を、「ノキ」は「ヌキ」の転化で浸食される状態を示している。これは山裾が川の流れによつて浸食され、徐々に曲線状に削られて行く地形を表現したものである。

この様な植物地名は、昔はタモの林であつたに違いないと思わせる点があり、また、現実にはタモの大木が繁茂していたりすると、偶然の一致とは言え驚かされることになる。

「旭」 玉置村

熊野神社の境内と裏山との間に挟まれた平坦地である。

「アサ」は水の浅い状態を、川のことを示している。

この地を中程にして、上手の武生村境より地名が塊淵、友安、堂前、松尾と並び、下手の中野木村境に向つて松崎、上堤、下堤、杉本とほぼ直線状に続いていた。

これら一連の地名の由来は、総て水に関連しており、人工的に造られた灌漑用の水路の流れを表現したものである。そして、この地は川中が広くなつて、水流が浅く緩やかに流れて下つていくことを表現したものであろう。

この様に氏神の近くに、縁起の良い地名があると、神の力に感わされてしまい、思わず迷路に足を踏み入れることになる。

「常田」 上野木村

玉置村境の北川に接する所で、堤防に添う比較的広い平坦地である。

「ツ」は港や川の渡し場を、「ネ」は根元や付根を、「ダ」は方向、場所、位置を示して

おり、北川の渡し場のある場所を表現している。また、「ツネ」の二音の言葉とすると、「ツメ」の転化で奥まつた所

や橋のたもとを示しており、橋のたもとにある場所の表現となる。

はたして、どの解釈が妥当なのであろうか、明解な由来は川底の泥に沈んだままである。

「渋谷」 中野木村

野木村誌によると、中野木と下野木との間にこの地があると記されている。

「シブ」は水垢のたまつた所、湿地、沼地を示す。また、滑らかなでない地形の表現にもこの言葉が使われている。

この山裾には古墳が残されているとの記録によれば、凹凸のある谷間の地を表現したものと云えるが、常識の上からは、強湿地を表現した地質地名とも受け取れる。

正に、シブトイ地名の代表であろう。

「桜谷」 下野木村

この地名や武生の「タモノ木」などを植物地名として分類しているが、実際に桜やタモの自生や植生に基づくものは、ほとんどないと言われて

いる。

「サクラ」は「サクリ」の転化で長く窪んでいる状態を示し、「サ・クラ」とすると狭くて岩が切り立つ状態を示している。

何れにしても、昔の過酷な日常生活では、花見をしたり

旧職員からの便り

思い出

俳句などに趣向を凝らす余裕はなく、生存するための必要性から命名してきたもので、純粋な地形地名であろう。

この様に、馴れの初めには惚れられする地名であつても、最後には裏切られることになる。



瓜生小 松井克夫

「私だけか分りますか。」あるお店で二十歳ぐらいの女性に声をかけられました。聞いてみると、小学校で教えたことのある人でした。最近こんなことがありました。幼くて

すぐに使える水はけのすばらしく良いグラウンドでした。体育の授業で利用したり、上中町の連合小学校の練習をしたりもしました。

かわい小学生が、突然目の前に成長して現れました。余りのその変容に驚かされます。十数年の年月を経たことを改めて感じます。また立派に成長してくれたこと、声をかけてくれたことにうれしい気持ちで一杯になりました。

秋になると体育館の裏ではサツマイモを焼いたり、冬になり雪が積もるとスキーをしたりもしました。

野木小学校と言えば、広いグラウンド。雨が降っても止んでしまえば三十分で水が引け、

当時、子供会の行事として毎年ソフトボール大会がありました。六月から八月上旬にかけて、放課後にはノックをしたりキャッチボールの相手をしていたりするなど、練習の手伝いをしていたこともありました。

ふるさとの自然に育まれ

第66回卒

嶺南教育事務所 奥本正樹

グラウンドの横にはプールがあり、当時は上中町の連合小学校で夏休みに水泳大会がありました。六月の末から梅雨の合間を縫って練習をしていました。寒い日もあり震えながら子どもが水泳をしていたこともありました。現在上中町の水泳大会はなくなり、それぞれの小学校独自で水泳大会するようになっていきます。

その他、毎年五年生の七月に田鳥の若狭湾少年自然の家での宿泊がありました。また六年生では、上中町小学校五校で集まり、奈良県や三重県に修学旅行へ出かけました。

それぞれの行事を計画するため何回も会議をし、担当を決め準備するのは大変でした。現在同じ上中町の小学生が集まってする行事は少なくなり、それぞれの小学校で特色を出して取り組みという形に変化してきましたが、それぞれの行事が今は懐かしく思われます。時々野木小学校の前を通ることがあります。小学生が遊んでいたり、少年野球をしたりしているのを見ると今でも当時勤務していたことを思い出します。

小学校の頃の思い出といえ、川や田んぼで遊んだことが印象に残っています。私が小学生の頃は、テレビゲームもない時代です。遊びと言えば魚をとったり虫を捕まえた、自然の中での遊びが中心でした。学校から帰るとすぐに、バケツ片手に網を持ち、近くの川へ魚とりに出かけたものでした。

また、夏休みには、よく連れ立って北川へ行き、泳いだり、魚を捕まえたりして遊びました。当時の北川は、所々深みがあり、魚にとつても隠れ場所の多い美しい川でした。時には、遊んでいて、足のつかない深みにはまり、溺れそうになったこともありましたが、たくさんの魚が群れをなし、川を上っていく光景が今でも記憶に残っています。危険な場所が多かった反面、スリルがあり、その頃の北川は、私にとって絶好の遊び場でした。夜、外へ出れば、満天の星が見られました。夏の夜空に

を覚えたものでした。

野木小学校に勤めていた頃は、家が学校に近いこともあり、休日には教え子たちがよく遊びにやってきました。近くの川へ、魚とりや釣りに行ったり、山登りに行ったり、自分自身が子どもの頃に戻ったような気持ちになり、一緒に遊びました。楽しくとても充実した毎日でした。

ちょうどその頃、県立博物館が中心となって、勝山市北谷町で恐竜化石発掘調査を行うこととなりました。学生時代、地質学を専攻し、化石発掘について経験があつたので、私もその調査に参加することとなりました。

発掘の当初は、骨の一部と化石が見つかっているだけでしたので、人力で谷川の崖の岩を崩し、一個一個ハンマーで割っていったものでした。その調査において、新たに恐竜の骨格化石や歯など、たくさんの化石が発見されたため、次年度から重機を使った大規模な発掘調査が行われるようになりました。十年にもわたる調査の結果、恐竜の全身骨格や足跡の連続歩行の化石が次々に発見され、福井県が日本一の恐竜化石産地となつた

のです。

今では、立派な恐竜博物館もつくられ、発掘された恐竜の化石が展示されています。石川県境に近い勝山市の山奥の村に、一億二千万年もの長い間、恐竜たちが静かに眠っていたのです。調査が行われる前までは、その場所から恐竜化石が見つかることは、学者ですら予想だにしませんでした。発掘を通して、あらためて自然の素晴らしさを知りました。

あと何年か経てば、上中町にも高速道路が作られ、町の景観も変わることと思います。高速道路や新幹線が私たちの町に通り、産業が発達することは、素晴らしいことかも知れません。しかし、それ以上に、山や川など私たちの周りの自然は大切なものだと思います。いくら、産業が発達しても、ふるさとの自然は変わらないままであってほしいというのが私の願いです。



野木小学校で新たなスタート

瓜生小 中村由美

私が上中町へ転任し、初めてお世話になったのが野木小学校でした。上中町のこと、野木地区のこともよく知らなかった私でしたが、地域の皆様方や職場の方々に多くのことを教えていただき支えていただきながら、少しずつ野木地区のこと、上中町のこと、わかるようになってきました。野木小学校でお世話になった五年間、たくさんの方々を指導していただいて、私も成長をさせていただきました。

在任中は、教科担任として一年生から六年生の子ども達みんなと触れ合う機会がありました。全員の名前と顔が一致するまで、しばらくは大変でしたが、みんなのことがわかってくると、楽しくなってきました。どの学年の子ども達からも気軽に声をかけてもらい、歓談することもありました。時には、内緒の話を教えてもらうことも。私自身としては、担任をしていた時には気づかなかったことにも

感じました。転任して二年目になります。が、県道を通る時はいつも野木小学校の様子が気になります。野木小学校は、私にとつ

て新たなスタートをきらせていただいた学校です。大切な宝物の一つです。野木小学校の今後ますますのご発展とご活躍をお祈りしています。

会員からの便り

還暦を迎えての同級会

第42回卒(昭和26年)

兼田 福井 康 二

「ミレニアム二〇〇〇」こんな見出しでメディアからの活字や音声等が出ない日はめずらしい。そんな今年、近年に無い記録的な出来事が政治経済それに自然界まで頻発しています。長期的な真夏日。有珠山、三宅島及び周辺諸島の火山地震活動。最近では東海地方を中心とした集中豪雨。

で巣立った。既に四人の級友も他界。今天を仰ぎ故人の冥福を祈る次第です。

改めて自然の恐ろしさを生きる人間として実感させられたものです。まだまだこんな事が続くのだろうか。いつかある雑誌で見た事があるノストラダムスの大予言がやはり二〇〇〇年なのか、と思ひ出されます。さて私達(四十二回卒)昭和二十六年年度卒業生は二十八名で、戦後すぐ復興途上の中

一目で分かる。交わす言葉はいらぬ。目と目、そして顔が笑っている。懐かしい瞬間、待ちに待ったひと時だったのです。その場で語られ、このお盆に小浜で全員に呼びかけ再会することに。その盆にはホテルで更に新しい顔が加わり、盛大に語り喜びの一夕であつた。その年明けの正月、お座敷列車で厄除けの伊勢詣り。京都駅から京阪方面の級友が加わり、宿と共に懐かしい語らいが夜深くまで続き、厄除の旅も成就出来た。また今年是有馬温泉と神戸の旅と続いております。老いて初めてからの同級会。年毎に大きく美しい花が咲き誇り大輪化してきた。来年は女性の皆さんの企画で更に楽しい旅の集いを託して、皆今から楽しみにしています。人との係わり、同級生の良さ、集う楽しみと先輩から聞かされて来た「同級会はええもんやでよ」の言が理解出来ます。これからこの同級会は続く事だろうと思ひます。この先日本経済も緩やかな改善が見え、その景気回復の中で更にIT革命を目指す二十一世紀への日本の繁栄、平和と人類の吉祥、それに自然災害の起きない安

心な暮らしの出来る事を祈りたいと思います。又同窓会誌のお陰で住所、氏名が得られ、同級会が実現出来たもので、この発刊に御尽力賜った

あの頃

第51回卒(昭和35年)

武生 福田 真由美

くやつたように思う。

昭和三十年頃の野木小学校の校庭。砂場やブランコ、遊動円木。職員室の窓を開けたところに二宮金次郎の像が建っていた。講堂の隅でのおはじきやまりつきを友達は見えているだろうか。あの頃の友達顔や学校がなつかしくよみがえってきます。

講堂と職員室を結ぶ渡り廊下。この廊下はゆるい坂になつていて、大きな上中町の地図が掛かっていた。その渡り廊下の正面に二階へ上る階段があつて、右に曲がると図書室、保健室、職員室、小使のおばさんの部屋が並んでいた。あの渡り廊下は本当にすてきだった。休み時間になると、その渡り廊下を通つて講堂へ行きおはじきをしたり、おしくらまんじゅうをしたものだった。ドッチボールもよ

関係各位に深く謝意を申し上げ、同時に本同窓会の更なる御発展を祈念し責分とさせて頂きます。

高学年は低学年の面倒をよくみだし、低学年の子達にとつて五年生、六年生はやさくして頼りになるお兄さんお姉さんだった。

山と田んぼに囲まれたあの小学校は全く居ごちのいい場所であつた。寒い冬は薪ストーブが置かれ、火付用の杉葉を武生のお宮さんの辺りへ拾いに行った。杉葉拾いしながら見つけた野苺。そういえば学校の裏庭にぎくろの大きな木があり、赤い実が重そうに口を開いていたのもなつかしい。

職員室の窓にぶら下つていた鐘。あの鐘が鳴つて授業が始まったのはいつまでだったのだろう。チャイムに替わつたのはいつだったか覚えていない。

私が小学校に入った年には、世の中も落ちついてきた頃だったのだろうか。その点幸せな学校生活だったのかもしれない。

出席簿は男子の杉山から始まり、男子が終わると杉山の女子から。今でも私はそれら出席簿の名前を順番に間違ふことなく言える。担任の先生

ふるさと野木

第58回卒(昭和42年)

三宅 玉井 はつえ

(旧姓 奥本)

が読みあげるあの出席簿。それに答える私達の「はい」。あの心地よさは何だったのだろう。想い出はふつふつと湧きあがり、しばしおだやかな気持ちにしてくれる。

なつかしい先生方、同級生の人達、先輩、後輩の皆さんの顔を思い浮かべながらペンを置きます。

私は、昭和三十七年から四十二年まで、野木で、小学生生活を送らせていただきました。担任の先生は、田辺民枝先生、永木伸子先生、本田吉夫先生でした。卒業してから三十年余りが過ぎ、月日の経つのは早いものだ、改めて思い返しております。

当時を振り返りますと、遠足で宮川から山を越え、矢代まで歩いたこと、臨海学校では久々子の海で真黒になるまで泳いだことなど、懐かしく思い出されます。今ではすっかりおじ様おば様になった同級生とは時おり会い、「〇〇ちゃん」と呼び合い昔話に花を

添かせております。どんなに貫ろくがついていても、そんなことはおかまいなしにつき合えるのが唯一同級生です。私の人生の中では、野木を離れて沢山の方との出会いがあり、その一つ一つが大切なことでしたが、ふるさとと言えるのは野木だけであります。それだけに言葉では語りつくせない思いがございます。さて、私は現在保育士として、上中町で働かせていただいております。平成九年から十一年までの三年間は、野木保育所に勤務しました。その節には野木の皆様には大変お世話になりました、ありがと

うございました。その時印象深かったことを少し書かせていただきます。野木地区のパワーと言いますか……。いつも保育所を守つたらんなん、助けたらんなん、というあたたい気持ちに支えられていたことです。台風で保育所の木が倒れてしまったことがありましたが、その日のうちに保護者の方が段取りをして、翌日の午前中にはきれいに片づけて下さいました。この件に限らず何かあることにまとも、快く力を貸して下さいました。どなたかが言われましたが、「子供のことやしあんじょうしてえ。」飾り気のない素朴な言葉。現在失われかけている大切な心が、野木にはしっかりと生き続けているように思いました。

このような素晴らしい心豊かな野木をふるさとにもつていきたいと思います。思い、微力ではありますが、皆様に教えていただきましたことを胸に、これからも日々、努力してまいります。

秋桜

ゆれてようこそ

野木の里

『私が小学校で得たもの』

第62回卒(昭和46年)

美浜町 和多田 雪 美

私が得たものは、いろいろと数知れずありますが、特に、丈夫な身体と健康な心だと自負します。

小学校の思い出と聞かれ、真っ先に思うのは、現在の健康で丈夫な身体を作ってくれた、堤から3キロあまりの通学路です。

今は車に乗って移動する事が多く、3キロあまりも歩くという事はまずありません。実際、小学校を卒業してから、あの道を歩いたことも一度もありません。今から思えば、良く毎日かよったなと我ながら感心します。

春は、道草を食うという言葉通りレンゲやシロツメクサを摘んで首飾りを作りながら帰り、夏は小浜のほうから迫り来る夕立に追いかけてられて逃げて走って帰ったり、冬には田んぼに積もった雪がカチンカチンに凍てついた上を歩いた朝の集団登校など、楽しく通い、雨や雪が降るうがカンカン照りだろうが、その頃

は何でも無かったように思います。

そのおかげで、何の苦勞も知らずに、現在の丈夫な身体が培われたと思つてます。

また、健康な身体と同時に、「ありんこ学級」で得た豊富な経験が、健康な心も養ってくれたと思います。

その「ありんこ学級」で、宮沢賢治など有名な文学作品にも出会い、親もいっしょになつて頭をひねり書いた文集を作ったり、銅版画にもトライ出来、夏休みには石膏で自分の顔を作ったり、卒業の際にはみんなで案を出し合い共同で製作した大きな油絵など、数知れないいろんな経験をさせていただきました。この「ありんこ学級」を企画実行していただいた担任の長谷先生(現在は美方高校の校長先生です)には、たいへん感謝しております。

身体や心の成長期である小学校時代を、丈夫な身体を培ってくれた自然豊かな野木の

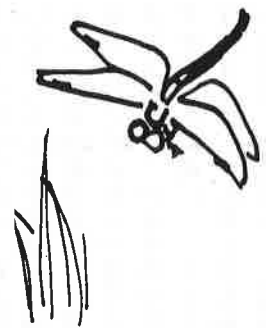
地と良い先生に巡り合え、楽しく愉快に送れた事を感謝しております。

今の子供たちも、舗装とでこぼこ道の違いはあつても、昔と同じ道を通い、情操豊かにいろんな事を学んでいることと思ひます。少子化の進む中ですが、益々の野木小学校のご発展をお祈りします。

心のふる里、野木小学校

第71回卒(昭和55年)

杉山 橋 本 有 司



自分のひざ小僧の少し上までしかない机。「なんて小さいんだらう。」：昨年度より息子がお世話になり、今年度、PTAの役員として学校にうかがうことが多くなつて思うことです。グラウンドは県道側に出で、広く、大きくなつたとはいへ、昔の面影そのままの校舎に足を踏み入れる度、懐かしい思い出がこみ上げてきます。

体育が大好きだった私の思い出は、やはりスポーツ少年団。夏のソフトボールに冬の剣道。特に剣道は二年生から始め、重い防具や竹刀に振り回されながら取り組んだのを覚えています。「前へ、前へ」と、常に攻めの姿勢で相手に臨めと、山田政孝先生には厳しく、愛情ある指導をしていただきました。雪の降る日の体育館の床は凍るほど冷たいものでしたが、さらに鍛錬のため、雪の積もるグラウンドをみんなが裸足になつて走つたことも忘れられません。その練習のおかげで輝かしい成績も数多く残せました。しかし、それ以上に辛い事を我慢する心や、何事にも挑戦しようとする気持ちが身についたように思ひます。

また、「あすなる農園」でそばやサツマイモなどの作物を

栽培したのもいい思い出です。苗植え、水やり、草取り、収穫と教室を離れ、体操服やズックをどろまみれにしながら、作物の成長に一喜一憂したものです。誰が一番大きなイモを掘り出すか競つたこともありました。収穫したそば粉で打つたそばの味、取れたてのサツマイモが給食に出たときのみんなの歓声が今でも思い出されます。知らず知らずのうちに作物に対する愛情や、感謝の気持ちが身についたのかもしれない。

今こうして振り返つてみると、ただ無邪気に過ごしていた小学校時代ですが、様々な先生にお世話になり、教えていただいたことが今でも自分の支えとして、心の中に生きています。「心に太陽・希望・自信かがやく」この野木小学校の児童であったことを、今改めて誇りに思ひます。

小学校で育ててもらつた心を糧に、今後も教員として、二十一世紀を生きる子どもたちの成長の手助けをしていこうと考えています。

毎朝、通勤の途中で見かける野木小の校舎を見ながら、「今日も頑張ろう」と自分に気合いを入れる毎日です。

思 い 出

第78回卒(昭和62年)

下野木 田 中 順 子

ひとりひとりの名前が磁石
 になって貼ってあった黒板。
 新しいグラウンドでの初め
 ての運動会。

もはや修業に近かった水泳
 や鉄棒、跳び箱の特訓。

グロテスクな仕上がりに自
 己満足した巨大なイカの絵。

毎日何をしようか悩まされ
 手抜きを覚えた「一粒の米」

週にひとつ、披露する機会が
 あり、そうそうドリルばかり

も写していらなかった。
 夏の帰り道、冷たくておい

しかった玉置の神社の水。
 ランチルームの壁に描いた

花の絵。
 負ければ校庭を走らなけれ

ばならなかった、男女対抗草
 むしり。

なぜか夢中になってしまっ
 たカエルの解剖。

いつ「スクラム」に載って
 しまうかわからない、まとめ

書きのできない日記。そうい
 えばあの「スクラム」という

ものは、子供心を知ってか知
 らずか、やたら簡単に名前が

載っていた。

当然のように担任がターゲ
 ットになった雪合戦。

音楽室で悲鳴をあげた「サ
 ソリ事件」、迷宮入り(?)の

「火の鳥事件」。
 何回やっても楽しかったパ

ーティー。大人の真似をした
 忘年会。掃除が大変だった

「ジュースかけ」。恒例のゲー
 ムは「すきやき」。

我先にと体育館に飛び出し
 ていった昼休み。

職員室で、毎週輪転機をさ
 わることになった学級新聞。

授業終了前に用紙が配られ
 るビンゴゲーム。

みんなで自転車で行った、
 担任の一人暮らしの家。(今思

えば留守でよかった。)それか
 ら、彼の家といえは福井の実

家。行ったのは卒業してから
 で、中学の制服を着て、うれし

そうにぞろぞろとおしかけた。
 思いつくままに挙げてみま

した。たくさんあってきりが
 ありません。途中、なぞの言

葉があつたという方、答えは

お近くの四十九年式の者にお
 尋ねください。

いつか、せつかく脱走した
 のに非常階段でみつかったし

まったカメがいました。今の
 私は、いろんな意味でちょう

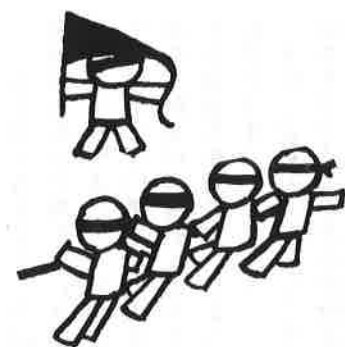
どそんな感じですよ。でも、カ
 メもカメなりにぼちぼち頑張

ろうと思っています。

二十五年間を振り返って

第79回卒(昭和63年)

堤 井 上 敦 子



大学を卒業し、上中へ帰っ
 てきてから、はや三度目の冬

を迎えようとしています。上
 中へ帰ってからの約三年間は、

初めての社会や仕事になれる
 ために必死で、今までのこと

を振り返る余裕はありません
 でした。しかしこの度『野木

小学校同窓会会報』への原稿
 依頼をいただき、これは良い

機会だと思ひ、私の二十五
 年間を振り返ってみることにし

ました。
 私の二十五年間の中で、一

番大きな出来事は、高校進学
 とともにこの上中を出たこと

だと思ひます。今から思ひ起
 こせば「よーあんなことした

なあ」と我が事ながら感心し

てしましますが、あの頃の私
 は必死でした。

私は三姉妹の末っ子として
 生まれ、かなり甘えた部分が

あり、そんな自分に嫌気が差
 していたような気がします。

このままの自分ではいけない
 何か変わらなくては!という

思いが私を動かしました。
 「高校から親元を離れるのは

早いのではないか」と周りの
 人に言われましたが、親元に

いながら考え方や態度を改め
 るという事は絶対無理だと判

断し、遠くの高校への進学を
 決めました。この進学理由は、

実を言うと両親に言ったこと
 はありません。両親には表向
 きの理由(国際的なことを勉

強したい)で武生東高校国際
 科への進学を説得しました。

そして、当たり前のことなが
 ら両親には反対をされました

が押し通してしまいました。
 見知らぬ土地での生活は辛

く厳しいものでした。しかし、
 自分で決断し、親の反対を押

し切ってまで決めたことだっ
 たので、一人で耐えるしかあ

りませんでした。また、時を
 同じくして父が単身赴任を始

めたため、母には大変な思い
 をさせてしまいました。こん

な辛い思いをして、また家族
 にも辛い思いをさせて、私は

何かを得られているのだろう
 が?と不安になり、焦る日々

もありました。しかし、無事
 に高校を卒業してみると、大

きなことをやり遂げたという
 満足感でいっぱいでした。そ

して、そのような経験があつ
 たからこそ乗り越えられたこ

とも少なくありません。
 あの時の経験は、現在の私

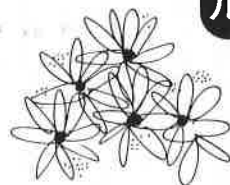
を大きく支えてくれています。
 あの時、それを許してくれた

両親に感謝。その気持ちを今
 一度思い出す今日この頃です。

家庭の日啓発作文コンクール



私の母子手帳



四年 辻 本 昇 子

今年の夏休み、私の「母子手帳」を見ました。こんなにゆつくり見るのは初めてです。自由研究で「自分史」を作ってみようと思ったからです。ひき出しの中に三きつ、有未・昇子・晁士とそれぞれ一きつずつ入っていました。

「ああ、私のあつた!!。」

大きな声が出ました。私は手帳を取り出し、わくわくしながらページをめくりました。

十一年前の秋、私がお母さんのおなかの中に入ったと分かった時に発行してもらった手帳でした。それから私の生まれる日まで、お母さんはずーっとこの手帳を持って、藤村先生の所に通っていたそうです。お母さんの体重やおなかのまわりが、日に日に大きくなっていくにつれ、私もおなかの中で大きくなっていき

生まれる日をまっていたんだなあと思いました。お母さんは、つわりがひどかったらしく、五カ月くらいまでとてもつらかったそうです。とても大変な思いをして私を生んでくれたんだなあ、涙が出そうになりました。大好きなお母さんのことがもともと大好きになった気がします。自分史を作るためもあつたけど、自分のことやお母さんのことをもつともつと知ってみたいという気持ちがあつたので、お母さんにインタビューをしてみました。

「私の生まれた時はどんな日だった?」

「私ってどうやって生まれてきた?」

「昇子の生まれた日は、四月のとってもいい天気やったわ。朝からちよつとおなかがい

かつたけど、でも予定日より二週間も早いしまさかなーと思とつたんや。それでお昼に入院のにもつも持たんとちよつとみてもらいに行つたら、もう頭が出てきとる、何をしとつたんやつて言われて、あわててぶんべん室に入つたら着がえる間もなく生まれたんやよ。」

と、お母さんが話してくれました。そして、

「予定日は五月五日やつたし、馬年やし、おなかもポンポンけつて、すごく元気な赤ちゃんやつたからてつきり男の子やと思つたわ。」

と、お母さんが笑つて言いました。

「はよ生まれすぎて、つけてくるのわすれたやろ昇ちゃん。ほんまは昇子やなくて昇助。」

「失礼しちゃう。今に女の子らしくなるわ。」

私は小さい声で言いました。ちよつとむつときたけど気をとりにおして、またまたインタビューを続けます。

「つわりってどんなの?」

「言葉では言えんくらいいらい。車にようた時、もどしたりしてえらいやろ。あんなのが朝も昼も夜も何カ月か続く。お母さんは三カ月くらいやつ

たけど、入院するくらいひどい人や生まれるまで続く人もおるんやよ。」

「えー。いややな。赤ちゃんほしいけど、そんなえらいのいやわ。」

「生まれる時つてどんなん?」

「いたいよ。めつちやくちやいたい。もういやつて感じ。でも不思議なんや。それがな、生まれた昇ちゃん達の顔見たとたん、けろつと忘れる。」

「へえ。」

いろいろとインタビューをしているうちにだんだん自分の事がわかつてきました。そして、どんな思いで私を生んでくれたのかや、お母さんと

私のつながりやいろいろな事を知ることができて、とてもいいけいけんになりました。

さらに母子手帳には、私がいつハイハイできたとか、何をしゃべつたとか、何がとくいで、何がすきで……とこまかく書いてありました。ますます、お母さんが好きになりました。思わずくつつきたくなりました。

私は、母子手帳を見たりお母さんの話をきいたりして、生んでもらつて本当によかつたと思いました。だから何に對しても一生けん命がんばろうと思います。そして命をそまつにしない人になろうと思いました。



けがから考えたこと

六年 田 中 駿 也

いつもの調子で、スピードをあげた。忘れたグロープのことは、ほんの頭のすみにしかなかった。足を前にのびし、急ブレーキをかけた。ザザッ。「あつ。」

と、思ったしゅん間、サンダルが前輪にひっかかり、前につんのめつて、自転車ごとひっくり返つた。左足の親指のつけ根あたりから血がドクドク出ている。

「大変や、なんとかせんと。」
 急いで、こわれた自転車をおし、血まみれの足をひきずりながら歩き出した。ズキズキ足が痛む。淳君の家の青いジーンズが止まってくれた。自分でも驚くほどはつきりと、
 「家まで乗せて下さい。」
 と興ふんした口調で、助けを求めた。淳君のお母さんが、
 「大変なことになったな。」
 と言った。淳君や七恵さんが、自分のティッシュを傷口に当ててくれた。友達は、ありがたいとつくづく思った。
 「ああ、これで助かった。病院に行ける。」
 と安心した反面、これからどうなるのか、不安も大きくなっていた。
 父の車ですぐ病院へ行った。父は、
 「大丈夫か、駿也。まあなんとかなるやろ。」
 と何度も言った。夜の病院は、静かで、人影もまばらだった。まずまず痛みが激しくなってくる。まもなく名前が呼ばれ、おそるおそるベッドに横たわった。左足からは、血がドクドク出ている。お医者さんがピンセットで消毒をしてくれる。ヒリヒリ痛くて泣きだしそうになっていた。

「傷が深いな。ぬおう。」
 ショックだった。あさつての恐竜博はいけんな。野球の県大会もだめかもしれん。もう思いきり遊べんな。もう最悪だ。次から次から頭の中いろいろなことが浮かんでくる。ギザギザにさけた傷口が、ぬい合わされていく。チクチク痛い。
 「足を動かしたら、あかんで、がまんしな。」
 と、何度も叱られた。歯をくいしばってがんばった。最後に痛み止めの注しやをした。ツーンと全身に痛みが走った。僕の左足は、足首まで包帯に包まれていた。
 家に帰ると、
 「駿也、大丈夫か。」
 と、待ち受けていた家族が、次々に声をかけてくれた。涙が出そうで返事ができなかった。
 「肉いっぱい食わんと、はよ治らんで。」
 と、祖母がいった。
 「駿也、すぐ治るぞ。」
 と、父もはげましてくれただ。なんとなくうれしかった。母は、夕食も食べずに、いろいろなところに電話していた。明日から毎日、病院通いで、母の予定も変更せざるをえなかったのだ。父は車庫で自転車

の修理をしている。僕一人のけがでみんな大変なんだな。ちよつとしたふざけ心でこんなことになってしまつてしまいい、くやしかった。三年間続けてきた野球がこんな形で終わるなんて……。キャプテンに電話した。グローブは倉庫にしまつてくれ、けがのことを心配してくれた。
 翌日のラジオ体操では、何人も人が僕の様子を聞いたらしい。母は、六時半に、診察券を出しに行つた。包帯がはがれるからと、あみの包帯や、くつつく包帯も買つてくれた。父は、世話になつた人のところへお礼を言いに行つた。祖父は肉や野菜を買つてきてくれた。淳君は、恐竜博のおみやげをもつてきれてくれた。ユニフォームの上だけでも着て記念写真に写つたらという、ありがたい申し出もあった。僕のことを真剣になつて考えてくれる家族や、心配してくれる周囲の人達がいれば、本当によかつたと思つた。
 僕の不注意が多くの人に迷惑をかけたんだな。僕は多くの人に支えられて生きていくんだな、傷口を見ると思っている。

将来の夢

野木小学校六年生

○ぼくは、大工さんになりたい。なぜかというと、大きな家を建てたいから。
 勝木 辰徳

○たのしそうなので、学校の先生になりたい。算数の勉強を教えてみたい。
 田中 駿也

○私の夢は、まだ決まっていけないけど、絵が好きなので、絵で表現できる仕事がしたいです。
 奥本 真理子

○私の将来の夢は、保母さんになることです。小さい子供たちを楽しませてあげたいです。
 奥本 恵理

○私の将来の夢は、犬の訓練士です。いろんな犬をしつけてみたいです。
 宮川 周子

○陸上選手になってオリンピックの百メートルに出て、金メダルをとりたいたいです。
 新田 耕太

○ぼくは、大きくなったら理科の先生になって、いろいろ教えてあげたいです。
 内藤 淳

○私の将来の夢は、トリマーになって犬やねこの毛を切りたいです。
 奥本 真理



お父さん帰ってきてね

三年 高木理名

「りな、おきよ。」
と、いつもわたしをおこして
くれたお父さん。朝は、なか
なかおきられないわたしを、
手を引っぱってくれたり、だ
つこしたりたいへんだつたと
思います。でも今、お父さん
は家にはいません。今年の四
月から仕事のかんけいで、岡
山県のかつ山市へたんしんふに
んしました。

三月のある日、お父さんか
らその事を聞いた時には、か
なしくてなみだがぼろぼろと
いっぱいでました。
「会社なんか、やめたらいいん
や。つぶれたらいいやんか。」
と、何回もわたしは、お父さ
んに言いました。でも、お父
さんは、わたしの言う事を聞
いてくれませんでした。そして、
お母さんにもお父さんが行か
ないようにたのんでみると、
「仕事やし、しかたがないや。
また帰って来るよ。」
と言いました。でも、わたしは、

「うん、いいよ。」
と
言うた、

「だったら、みんなでつ山へ
行こう。」
と言うと、兄ちゃんは、
「行くはずないや。りな、一
人で行け。」
と言いました。わたしは、何
も言えなくなつてだまつてし
まいました。
それからもう五カ月がすぎ
ます。四月のころにくらべる
と、少しはなれてきました。こ
はんを食べる時もおはしは
一つあまるし、ふとんをし
くもふとんは一つあまります。
その時は、なんかへんなかん
じがします。

兄ちゃんも、平気な顔をし
ているけど、本当は、さみし
いやろなあと思います。それ
はお父さんと、キャッチポー
ルができないからです。とき
どき、わたしが、
「兄ちゃん、キャッチボール
して。」
と言うと、

と言つて、うれしそうにして
くれます。

お父さんのいるときだと、
「いやわ。りなは、あかん。」
と言つていたのに、今は、

「りな、ちゃんとなげやあ。」
とおこりながらでもしてくれ
ます。こんなときだけは、お
父さんがいなくても、いいな
あと思います。

毎週金曜日の夜になると、
お父さんは帰ってきて、月曜
日の朝早くにまた行きます。
車で高そく道路を通つて三時
間ぐらいかかります。帰つて
くるのもたいへんやなあと思
います。やつぱりお父さん
の顔を見たいです。

お父さん、これから冬にな
ると雪もつもり、帰つて来る
のもたいへんだと思うけど、
わたしたちは、金曜日を楽し
みにしています。事をしておこ
さないように、気をつけて帰
つてきて下さい。

がんばれ、元気な、元気な
お父さん。

お父さん。



○私は、大人になったらおかしをつくつて、おかしやさ
んになつて、お店を出したいです。大橋彩香

○将来プロ野球選手になりたいです。できればキャッチャーを
がんばつて、レギュラーをとりたいです。倉谷郁也

○ぼくはプロ野球選手になりたいです。それは、日本シ
リーズでプレーしたいからです。西一嘉

○私は将来、マンガ家になりたいです。そのマンガを大
ヒットさせてアニメにしたいです。植野早織

○ぼくは将来、将棋の棋士になりたいです。羽生さんの
ように強くなりたいです。竹原翔

○ぼくの将来の夢は、プロ野球選手になることです。いろ
いろなピッチャーと対決したいです。清水大輝

○ぼくの将来の夢は、カメラマンになつて、野生の動物
をいっぱいとることです。山形真大

○ぼくは甲子園に出て活躍し、ドラフトでプロに入りホー
ムランを打つて、有名になりたいです。高木卓

○ぼくの将来の夢は、大工になることです。そして、い
ろいろな家を建てたいです。辻井清祐

○私の将来の夢は、いまのところありません。でも、で
きるだけお金をかせげるのがいい。居関夏美



夏のある日

五年 辻井ひとみ

ある朝、テレビを付けると、「少年犯罪」という文字が見えました。

「いや、またやわあ……。」と、お母さんが言いました。

「何?。」

と聞くと、

「注意されたのに切れて殺したんやで。」

と言いました。すごいことするなあ……と思いました。わたしだったらぜったいしないと思いました。

ただおこられただけで人殺しをするなんて。しかもその子は高校生やのにと、わたしは思った時、お母さんが、

「おこつて殺されるなんて何にも言えんね。」

ご飯を食べながら、お母さんは続けます。

お母さんの小さいころは近所にこわいおじさんがいて、悪い事をする必すしかられたさうです。本当にこわかつたけど、反対にいつもあぶな

いことのないように見ていてくれたさうです。

子どもの中にもガキ大将がいて何でもその子のいう通りけんかをするのも止めるのもその子がいたから、今のよう

にお母さんは、はしをとめて話します。

「いじめつてあつた。」

と聞くと、

「あつたよ。みんなが無視したり、えんぴつかくしたり、くつふんだり。」

少し思い出し笑をした後、

「でも自殺する子は一人もいなかったな。」

と言いました。

「何で。」

の命を自分で消したり、うばつたりするには、きつと相当な思いがあつたはず。私にとつての死は、おじいちゃんが死んだときです。昨日までは息をしてたおじいちゃんが、

学校から帰つてきたら冷めたくなつていました。虫を殺す様に人を殺す人はどうしてもわかりません。こわいからです。

お母さんは言います。

「あんな達を生んだ時、お母さんはまず五体満足で生まれた事に喜んで、次にあんな達の幸せを願うんよ。」

それやのにいじめたり、殺したり、殺されたり。多分親にとつて一番不幸だね。少し哀し気に言つたと思つたら、

「あつもうこんな時間行かなかちや。」

お母さんはバタバタとたくをして、

「ばいばい。」

と言つて仕事にいつてしまいました。

私は思います。一人一人じやなく、みんなのために悲しい事件がおこらないように。

お母さんが行つた後にメモが一枚ありました。

「朝からすごい話したけど、今日もあぶない所へ行かないように。」

「夕奥尔もつてきてくれ。」お父さんが今朝もまた、私に言いました。



みんなにさわらわって

五年 森岡 紗貴子

この夏、私は、七日間家族とはなれて生活しました。八月十九日から二十五日まで『鯖街道百キロの旅』に行つていたからです。

初めの日は、フアイトまんまん、むねをわくわくさせて少年自然の家へ行きました。行つてすぐに友達もできまし、班交流会では、七人が仲間になりました。この時は、はずんだ気分でした。

ところが、夜になって荷物を整理していた時、とつ然目のまわりが熱くなつてきました。家族とはなれて一人でやりきれぬんだらうか……と、

だんだん不安になりました。泣いちゃいけない、泣いちゃいけないと思つても、ひとり

でになみだがこぼれおちてきました。私が泣いている間中、



リーダーがとなりで、だまつて見ていてくれました。

次の日の朝、バスで小浜のいづみ町まで行きました。出発のとき、じいちゃんがぎでくれました。じいちゃんは、私が鯖街道へ行くと言つたとき、

「そらええ、行つてこい。」と言つていたので、いざ出発すると、とても心配で、

ばあちゃん、毎日予定表を見ていたさうです。

三日目は、一番しんどい根来坂ごえでした。その夜、田中先生が、

「家族からの手紙をわけます。」とおっしゃいました。読んで

いるうちになみだが出そうになりました。

『苦しいときにはいつでも助けてあげます。だからがんばつて。』という文に感動しました。それから返事

のはがきを書きました。じいちゃんとはあちゃんは、それを読んで泣けてきたそうです。

次の日の朝、私はもう一度その文章を読みなおして、京都へ出発しました。それから、ただひたすら京都をめざして歩きました。苦しくて、この一步は京都へむかつています。京都についたら家族と会えるのです。

六日目、くら馬寺へ着きました。冷たいお茶を飲んで、たみにころがりました。たまたみのいい香りがして、幸せだなあと思いました。冷たい木の板のゆかとは、比べものにならないあたたかさがありません。五日ぶりの入浴もしました。お湯がとても気持ちよく、さっぱりしてあがりました。七日目、いよいよゴールです。ゴールの商店街でお父さんを見つけたとき、思わずかへだしそうになりました。お母さんは、にこにこ笑いながら、小声で、

「やったやん。」
と言ってくれました。

解散式が終わり、リーダーや友達とわかれてから、まっすぐにお父さんとお母さんのところへ行き、お父さんにとびつきました。

「やったで。百キロ歩いたで。」
「ようやった。ようやった。」
お父さんの目は、ちよつとうるんでいました。

帰りの車の中で、私は自分の経験をお父さんとお母さんにしやべりまくりました。

家に着くと、たん生日にかざるわかざりが、天じようをせりようしていました。

「お姉ちゃん、お帰り。」

妹がとびだしてきて、大きな声で言いました。家に入つてたみに大の字にねつころがりました。くら馬寺とおなじ香りがしました。

その日の夕食は、私のリクエストの冷しゃぶでした。食べていると中、妹がひよう賞じようをくれました。妹特製の絵と文でした。

その日は、家のものがみんなめずらしく思いました。テレビ、本、れいぞう庫、そうじ機……。今はずいぶんらくな生活をしているなと思えました。

鯖街道は、しんどかつたけど、たくさんいい事もありました。鯖街道に行ったことで、

家族がどんなにきさえていてくれたかも、わかりました。

これからは、できることから少しずつ、自分の力でやっていきたいと思えます。



野球を支えてくれた家族

六年 清水 大輝

八月十三日、福井県営球場午後三時四十五分、ぼくのスポーツ少年団の野球が終わった。去年九月、新チームのキャプテンになってから三十七人のチームメイトと強いチームを目指して、いっしょうけんめい練習をしてきた。練習試合では、よく勝てたが、公式戦では、なかなか勝てなかった。七月のれい南ライオンズは、いであごうにサヨナラ勝ちした時は、本当にうれしかった。その時はメンバーだけでなく、スタンドのお父さんやお母さんもバンザイをして喜んでくれた。

また、けい公園で行った親子パーベキューでは、いろいろな人と楽しく話ができた。その時の肉は、とてもおいしかった。

野球を通じてたくさん友達ができ、たくさん人の人に野球を教えてもらう事ができた。

また、家でいつも、

「だいじょうぶか。むりせなよ。」
と、おばあちゃんが声をかけてくれた。その声を聞くと不思議と気分がよくなった。また、足が痛いのに、野木小学校まで応えんにも来てくれた。次に姉ちゃんと妹。二人ともあまり野球の事は知らないけど、試合が終わると、

「どうやった。打てたか。」
と聞いてくれて、勝つた時は、ぼくといっしょに喜んでくれた。特に姉ちゃんはキャプテンでなやんだ時に、

「気に入るな。がんばれ。」
とはげましてくれた。

お母さんには、洗たくと弁当でお世話になった。ぼくはキャッチャーをしていたので、みんなの倍くらいユニホームをよごした。お母さんは、夜おそくなつてもがんばって洗たくをしてくれた。また、弁当作りでは、栄養に気をつけて、勝利弁当を作ってくれた。いそがしくて試合にはあまり来てもらえなかったけど、

「バッティングのフォームがカッコいいよ。」
と、よくほめてくれた。

最後に父さん。父さんにはキャッチボールの相手やバッティングセンターでお世話になった。かんとくやコーチに、「大輝のバッティングは父ちゃんといっしょやな。」

とよく言われた。初めは何も思わなかったけど、インコースをこうかいに引っぱるバッティングには自信が持てるようになった。

バッティングセンターで父さんと並んで打っている時に、よく似たレフト方向にライナーが飛ぶとうれしくなった。おかげで三国遠せいの加戸戦でホームランを打つことができた。また、キャプテンとしての心がけやキャッチャーのリードについてくわしく教えてもらった。これからも野球をしていくので、どんどん教えてもらいたいです。

考えてみると、ぼくのスポーツ少年団の野球は家族にたくさんはげましてもらったからできたのだと思う。

三年間のスポーツ少年団の野球は本当に楽しかったです。家族のみなさん、

「ありがとうございました。」

平成11年度 野木小学校同窓会会計決算書

〔収入の部〕

項目	11年予算	11年決算	増減	備考
繰越金	19,491	19,491	0	
会費	302,000	303,000	1,000	1,000×303
広告掲載料	0	400,000	400,000	27事業所より
雑収入	1,000	7,076	6,076	会誌10冊分 貯金利息76円
繰入金	0	0	0	
合計	322,491	729,567	407,076	

〔支出の部〕

項目	11年予算	11年決算	残額	備考
会議費	30,000	20,480	9,520	役員会会誌編集委員会弁当代 他
事務費	24,000	34,990	△10,990	会報発送用封筒
通信費	5,000	0	5,000	
会誌費	220,000	539,432	△319,432	印刷代、郵送料、テレホンカード 他
記念品費	8,500	8,568	△68	卒業生記念品
總會費	20,000	23,489	△3,489	理事總會弁当代
特別会計費	0	50,000	△50,000	特別会計へ繰り入れ
予備費	14,991	31,800	△16,809	退任者記念品、香典、見舞
合計	322,491	708,759	△386,268	

収入決算額 729,567円 支出決算額 708,759円 = 20,808円 残金20,808円は12年度へ繰り越します。

監査の結果、正確に執行されたことを認めます。

平成12年4月27日

監事

森 克孝 (印)
高橋 一 (印)

お詫びと訂正

編集後記

昨年度発行いたしました同窓会誌第4号に、左記の誤りがありました。大変重大な誤りがありましたこと、深くお詫び申し上げます。特に関係の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。重ねてお詫び申し上げます。

会員の皆様には、お手数ながら訂正をお願いいたします。

頁	回	氏名	誤	正
47	16	松宮 徹雄	上中町堤76-14	死亡
50	19	竹村 清松	名古屋市名東区平和ヶ丘	死亡
51	20	森口 茂	掲載漏れ	死亡 (お名前が漏れていたので、付け加えをお願いします。)
53	23	西 宗雄	死亡	愛知県丹羽郡扶桑町 高雄扶桑台337
60	30	東 又夫	上中町玉置44-15	死亡
63	33	田中佐久治	上中町下野木64-23	上中町堤64-23
65	34	長谷谷益夫	34回卒 死亡	35回卒 死亡

今年度も皆様に同窓会報をお届けできますことを、編集委員一同の喜びとしてます。

野木小学校同窓会会報も十三号を数え、これまで数多くの皆様に寄稿していただきましたが、本年度も同窓会報への寄稿をお願いいたしましたところ、快くお引き受けいただきました皆様に、編集委員として心よりお礼申し上げます。会員の皆様のお便りあつての同窓会報であり、ご多用の中、原稿執筆に時間を割いていただきましたこと、誠に有り難く重ねてお礼申し上げます。

さて、野木小学校には今まで体育館・校舎裏(武生側)に昔の校庭が広く残っておりスキー場も設置されていましたが、この度旧校庭の武生寄りに住宅地と道路が造成されました。スキー場は兼田寄りに移設され、旧校庭の様子も一変しました。数年後には住宅が並び、そこから野木小学校に通う子どもたちを見ることになると思われまふ。会員の皆様には、野木小学校の近くをお通りになられたときにぜひ、校舎裏の様子もご覧ください。県内外の皆様には会報をお届けしていませんが、例年、十通以上の会報が宛先に居住されていない等の理由で返送されてきます。野木地区各集落を回覧し、確認していただいた名簿をもとに発送させていただきます。事務局までお知らせいただけると幸いです。